

急がば回れ！ 実演芸術を支える専門家たちの挑戦

音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の実演芸術は、舞台上に立つ人だけで成り立つだろうか？ 実は、観客の目に見えない部分を支えているのは、プロデューサー、制作者、音響や照明等の舞台技術者等の専門性を持った人々。一つひとつの舞台作品は、大勢の専門家が集結してつくりだされるのだ。実演家もスタッフも、劇団やオーケストラ等の芸術団体や劇場に所属している人もいれば、フリーランスとして活動する人もいる。

そうした実演芸術の専門家たちが、視野を広げ、スキルを高めていくために、所属団体とは別の団体や劇場での研鑽の機会を提供するのが、文化庁「国内専門家フェローシップ制度」。芸団協は事務局として、数ヶ月にわたる研修のサポートをしている。2017年度は8名が各地での研修に挑戦した。

芸術創造を続けていくためには、キャリアに応じた研鑽の機会が必要だ。それぞれが能力を高めること、そして地域を超えて網目のように専門家同士のつながりが広がっていくことは、全国各地で私たちが素晴らしい芸術作品を鑑賞するための、大切な下支えになるのだ。

知多市勤労文化会館の館長・樋口寿弥さん（運営管理）は、公的資金を活用して行う文化会館の活動について、自身の考えを整理するためにもあらためて学びの機会を得たいと、可児市文化創造センターでの2ヶ月間の研修に挑戦。劇場職員としての考え方、地域における劇場の存在意義を考え、多くの人たちに伝えるためのヒントを得た。研修を通して、地域の人たちと一緒に社会課題を捉えていきたいという目標が生まれ、支え合いが生まれる会館を目指したいと意気込む。



「かに寄席」にてスタッフと（写真中央）



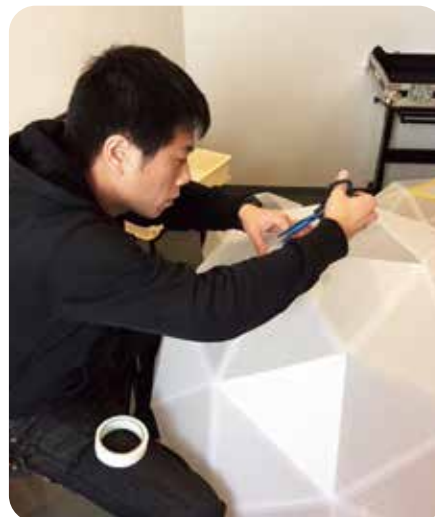
NPO法人こどものみかたを主宰する五田詩朗さん（企画・制作）は、自身の演奏家としての経験を生かしながら、クラシック音楽のワークショップやコンサート等を企画してきた。立ち上げ間もないNPOの運営に活かすために、ミュージアムシニアフォーリーホールで5ヶ月間にわたる研修を実施。研修を通して、企画から本番までの事業の一連の流れをホール職員とともに経験する中で、地域、ホール、芸術団体、行政が連携することの重要性を知った。これまでの演奏家の視点では気づかなかった側面からコンサート等の事業を考える機会となった。

研修として実践したワークショップの1コマ



石見神楽の衣装を特別に着させてもらったことも貴重な経験

沖縄県南城市にあるシュガーホールの小川恵祐さん（企画・制作）は、島根県芸術文化センター・グラントワにて2ヶ月間の研修を行った。地域芸能が盛んなイメージがある沖縄だが、劇場が市民参加型の事業に取り組む際、どのように地域の人々との関係を築いていくかを課題に感じていた。グラントワでは市民ボランティアの活躍も大きく、劇場と地域の人々が文化振興というミッションを共有しながら、劇場運営を市民が支えているような気概を感じた。地方における公立劇場の役割を確認したという。



舞台上で使う道具を製作する様子

水戸芸術館の目原瞬さん（舞台技術）は、北九州芸術劇場にて2ヶ月間の研修を実施。危険箇所での注意喚起の表示や、機材の安全かつ効率的な保管等、市民の利用も多い館ならではの工夫を発見できた。大勢いるスタッフ間での情報共有の仕方も含めて、作品を上演するだけに留まらない、劇場の技術スタッフとしての新たな視点が得られたという。また、ワークショップに携わったことで事業への関わり方を改めて考える機会となった。

国内専門家フェローシップ制度
詳細は下記サイトから
www.geidankyo.or.jp/renkeikoryu/